

アジアのくらしプロジェクト ラオスプログラム2024

国際交流活動実施報告書

2025年3月31日(4月15日追記)

建築・環境デザイン学科 橋本潤

■活動期間

2025年2月27日(木) ～ 2025年3月8日(土)

■活動場所

ラオス人民民主共和国 ビエンチャンと周辺地域

■参加学生

・建築・環境デザイン学科

3年生:市川萌乃 奥川司 後藤健太 薦田貴汰 田中祥象 馬場田愛彩 藤巻杏那 増渕夏乃

・大学院建築・環境デザイン研究領域修士課程

1年生:リュウ・ショウネイ

2年生:コウ・ウヒ

計10名

■教職員

岸本章教授 橋本潤准教授 今井晴登副手

■概要・背景

近年、開発が進み急激に変化しているラオスの生活に焦点をあて、その伝統や習慣を活かしつつ、未来に向けた暮らしの在り方についてデザイン提案を行うプロジェクトである。学部3年生・大学院修士課程の学生を対象に、ラオス国立大学建築学部と共同でフィールドリサーチとワークショップを行った。

2017年度にスタートし、コロナ禍を挟みながら、今年度は6回目の実施となる。

■報告

1. 全体スケジュール等

前半の4日間にビエンチャンと周辺地域のフィールドリサーチ、後半の4日間にラオス国立大学建築学部内のFAR Learning Centerにてワークショップを実施した。今年度からは現地集合・現地解散とした(7名の学生は教員と同じフライトで移動)。

ラオス国立大学側は Mii Sithixay INSISIENGMAI 教授(ミー先生)が担当して下さり、多摩美術大学10名、ラオス国立大学20名、総勢30名の学生が参加(ラオス国立大学建築学部の学生は下記5学科から各々4名)。

Architecture／Urban Environment／Product Design／Interior Design／Building Technology

2月27日(木) AM: 成田空港発	ベトナム・カンボジア経由
PM: ビエンチャン着	ホテル周辺の散策
2月28日(金) AM: リサーチ	ラオス国立大学学生と合流／ビエンチャン: 寺院・住宅・市場等
PM: リサーチ	ハースワン村: 民家・夕食調理・祭事参加・ホームステイ等
3月 1日(土) AM: リサーチ	ハースワン村: 伝統的な民家等
PM: リサーチ	ビエンチャン: 製塩工場・鉄道駅・国境等
3月 2日(日) AM: リサーチ	ビエンチャン: 建設現場・公共施設・商業施設・寺院等
PM: リサーチ	バン・スタン・タイ村: 寺院等
3月 3日(月) AM: リサーチ	バン・スタン・タイ村: 農地・伝統的な民家等
PM: ワークショップ	テーマ検討・グループ分け(5グループ)
3月 4日(火) AM: ワークショップ	コンセプト検討
PM: ワークショップ	コンセプト検討
3月 5日(水) AM: ワークショップ	デザイン検討
PM: ワークショップ	デザイン検討
3月 6日(木) AM: ワークショップ	デザイン検討
PM: プレゼンテーション	講評・親睦会
3月 7日(金) AM: 自由時間	
PM: ビエンチャン発	ベトナム経由
3月 8日(土) AM: 成田空港着	

2. フィールドリサーチ

ビエンチャンと周辺地域(2カ所の農村)にて住宅・寺院・市場・公共施設・商業施設など、生活に関わる多様な場所をラオス国立大学建築学部 of 学生と共にリサーチした。

ビエンチャン近郊のハースワン村にて両校の学生がホームステイを行った。1泊だけではあるが夕食の調理を手伝うなど、実際の生活の一端を体験するホームステイの実施はプロジェクトの肝であり、ラオスのくらしを知る上で有効であると考えている。また、今年度は村の寺院で行われる祭事と重なり、貴重な機会となった。

ワット・オントウ。ビエンチャン中心部の寺院。



ワット・シーサケット。ビエンチャンに現存する最古の寺院である。



比較的新しい都市部の戸建住宅。
コロニアル調(?)の住宅が多い印象。



キッチンに日本と大きな違いはないが、新しい住宅でも屋外に
炭火を使用して調理するためのスペースが設けられている。



製塩工場。地下数百メートルから塩水を汲み上げている。



ベトナム戦争におけるラオスの様子と、不発弾等による
影響や、そのサポートの取組を紹介する施設。



メコン川にかかる国境の橋。徒歩で中央まで行ける
が、国境は超えられない(対岸はタイ)。



国境の駅を出発する貨物列車。左の道路鉄道併用橋を渡ってタイ
へ向かう。国境の路線以外にラオスの鉄道が開通したのは2021年。



農村部の伝統的な高床式住居。



農村部の伝統的な高床式住居。壁が竹で編まれている。



ホームステイの夕食の支度を手伝う。
アヒルを絞めて、羽を取り除いている。



軒下での夕食。
それぞれ手分けをして調理した皿が並ぶ。



お世話になったホストファミリーの皆さんと共に。



3. ワークショップ・プレゼンテーション

ラオス国立大学建築学部内の FAR Learning Center にて実施。フィールドリサーチを基にテーマを定め、5グループの混合チームに分かれてデザインを検討した。実質3日間でテーマ設定からデザイン提案までを行い、4日目にプレゼンテーションを行う、ハードなスケジュールである。日本語・ラオス語・英語・中国語が飛び交う形でコミュニケーションを取りつつ、スマートフォンの翻訳機能を駆使する様子が時代を感じさせる。

日本とラオスの文化の違いから、なかなかお互いの思考が伝わらないグループもあったが、提案が具体化していくと、ディスカッションも活発になっていく。このプロジェクトの醍醐味である。

ワークショップ最終日に両校の教員（多摩美2名・ラオス国立大学10名程度）が参加して、プレゼンテーションと講評が行われた。限られた日数の中、社会的な課題や可能性についてユニークな提案が見られた。講評後は親睦会が開催され、学生同士の名残惜しい様子が印象的であった。

リサーチを基に各自興味のあるテーマを書き出し検討。
方向性の似ている学生がグループを組んだ。



5グループに分かれ、ディスカッションをしながら、実質3日間でコンセプトとデザインを詰めていく。



Mii Sithixay INSISIENGMAI 教授（ミー先生）。
初期から尽力いただき、過去に多摩美にも来校された。



ラオス式焼肉「シンダート」の青空レストランで交流を深める。
「シンダート」は焼肉としゃぶしゃぶがミックスされた様な料理。



プレゼンテーションは日本語とラオス語で行われた。



プレゼンテーション後の親睦会。



関係者の記念撮影。ラオス国立大学には制服があり、建築学部の学生はオレンジのネクタイ。日本へ留学していた教員も多い。



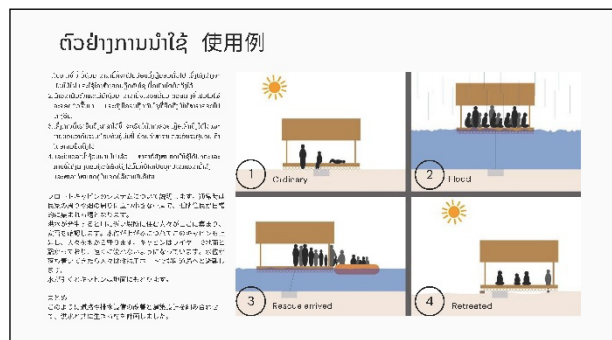
4. デザイン提案

ラオス国立大学建築学部の学生は5学科からの参加があり、テーマの幅は広がった。

※詳細は各グループの資料を参照

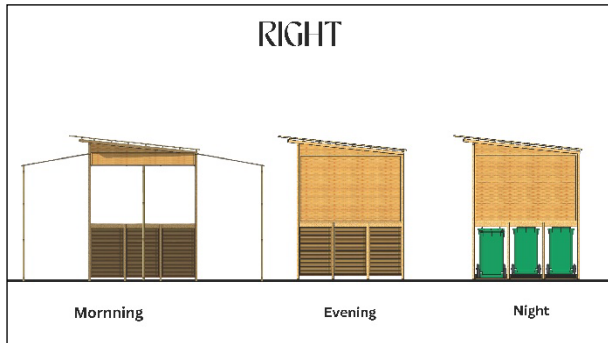
•Infrastructure for Life

メコン川沿いの農村における雨季の洪水に対するシステムと土木の提案



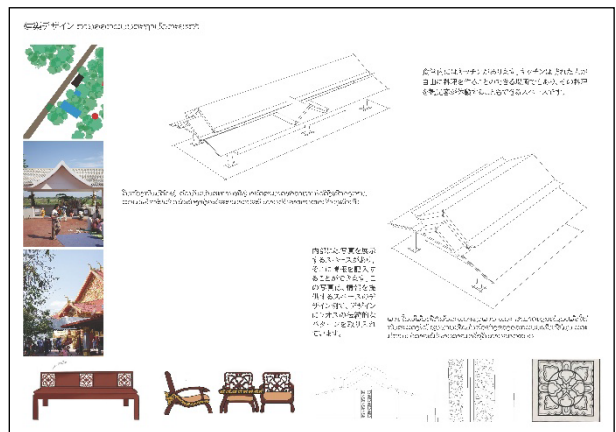
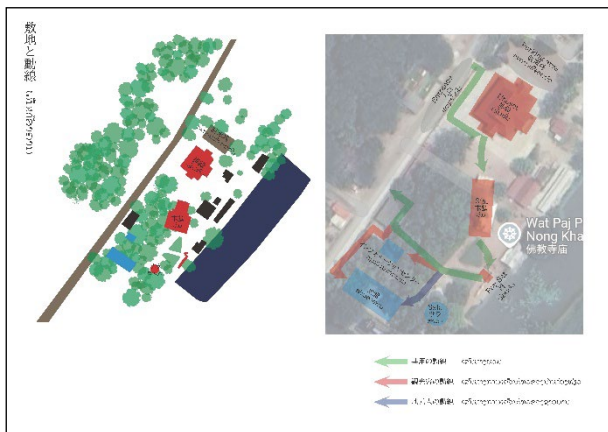
•GARBAGE STATION

ゴミ箱やゴミ収集のシステムの提案



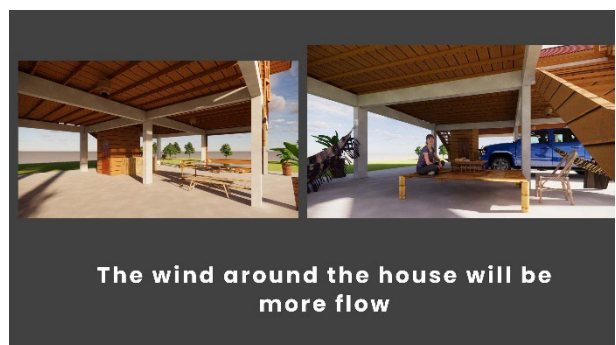
•Wat Paj Po Thong Nong Khamsan Temple Redevelopment : A New Plan for Tourism and the Local Community

ワット・パイ・ポー・トーン・ノン・カムサン寺院再整備：観光と地域のための新たな計画



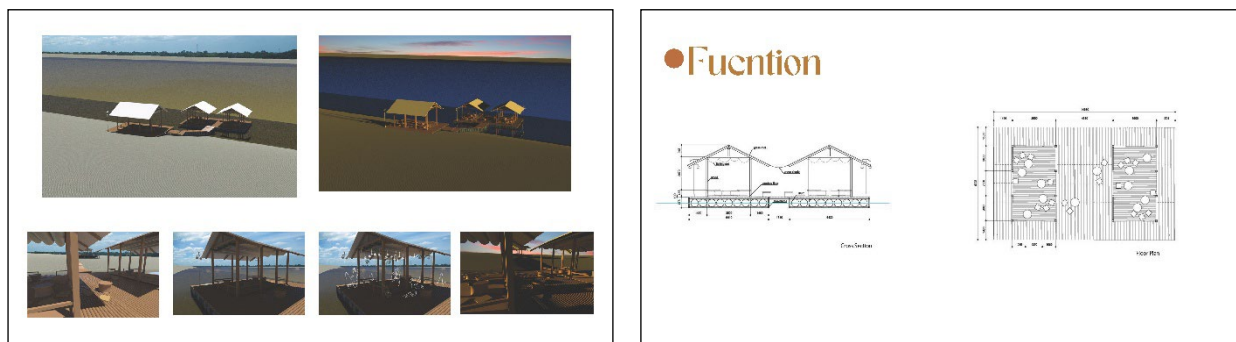
•CULTURAL CONSERVATION

伝統的な生活様式の魅力を取り込んだ新たな住居



・SALA SARA Floating with the wind become the heart of the local river

メコン川に浮かべる多目的フローティング建築



■総括

ラオスの学生と1週間以上を共に過ごし、実際の生活の一端を経験することで、これから学生がデザインを考える際に、新しい思考や視点が生まれることを期待している。異文化に直接触れて様々な学びを得た様子は、学生の言動や報告書からも強く感じる。ラオスの学生にとっても日本の学生の視点は新鮮で、自国の文化を複眼的に捉える機会になった様子である。プロジェクトが終了した翌日(滞在最終日)の自由時間は学生同士が積極的に交流していて、数名のラオス国立大学生が空港まで見送りに来てくれたことが印象的だった。

また、ラオス国立大学側の担当者である Mii Sithixay INSISIENGMA 教授(ミー先生)とは、両校の提携についても継続して協議を進めて行くことを確認した。